

平成29年3月2日、政策秘書課職員と話した内容です。

錯覚

長久手では、昭和38年に初めて道路のアスファルト舗装が行われ、昭和39年に簡易水道が通りました。我が家では、昭和41年に耕運機を買い、昭和44年によく冷蔵庫が入りました。今は、便利なまちになりましたが、その頃は、瀬戸や名古屋に比べ、10年遅れていると言われていました。

耕運機を購入する前、田んぼの作業は、家族だけではやりきれず、近所に手伝いをお願いしなければできませんでした。手伝いのお礼は、いつも大根と人参、油揚げの煮物と、鶏飯というメニューのお昼ご飯で、それをみんなで食べ、食べ終わると「さあ、もう一仕事」と、またみんなで作業したものです。

暮らしは不便で、何事にも、家族、近所と助け合わなければ、食べていけませんでした。

今、暮らしは便利になりました。ボタン一つで快適な室温になったり、ご飯が炊けたり、お風呂が沸いたりするようになりました。他の人に頼まなくても、生活に困まることはなくなりました。

今のような便利な生活になったのは、ほんの50年前からです。人類の長い、長い歴史の中では、今の生活の方が特別な状態です。

しかし、そうした便利な生活を送るうちに、いつしか私たちは、「何でも自分の思うようになる」と錯覚してしまっているように思います。また、相手を思いやることや、互いに辛抱することを忘れてはいないでしょうか。

自分のことですら、思うようにならないのに、ましてや他の人は、自分の思うようにはなりません。最近、増えている親子間での殺人や、子どもへの虐待、DV、いじめなどの根本には、「何でも自分の思うようになる」という思い込みがあるように思えてなりません。

今こそ、互いに向き合い、認め合うという、わずらわしい関係づくりに敢えて挑戦しなければ、将来、もっと悲惨な状況になりはしないかと心配しています。

ほんの50年前までは、好むと好まざるとにかかわらず、家族、近所が向き合い、助け合わなければ暮らしていけませんでした。

市民主体のまちづくり、計画づくりは、そうした関係を取り戻す挑戦でもあるのです。

市長の話を聞いて～

この話を市長とする直前、同僚と「近々、家族の会話を聞いて、勝手に必要なものを発注してくれる機械が発売されるらしい。そうなれば、便利だけど、家から出る必要がなくなって、運動しなくなって、寝たきりになっちゃうんじゃないか」「だったら、宅配じゃなくて、安否確認も兼ねて、近くのコンビニで手渡しでしか受け取れない方法にして、外出する機会を無理矢理でも作る必要があるんじゃないか」という話をしていました。

いくら人工知能が発達して、生活が便利になったとしても、やはり、どこかで人間同士が交わる機会を設けなければ、暮らしていけないのではないかと思います。